

谷崎文学の泉に立つ5人の女神

ある時はあでやかに彩られ、ある時は妖しく描かれる女、そして、揺れ動き、翻弄されていく男。展示では5人の女性が谷崎に筆をとらせたともいえる作品と関係資料をご覧ください。

①『痴人の愛』初版本(1925年、改造社刊)

美少女を理想的な貴婦人に育て上げようとした生真面目なサラリーマンが、日々増していく彼女の性的魅力に翻弄される物語。1915年に最初の結婚をした谷崎が、妻千代の妹で西洋人のような美貌を持つせいをモデルに描いた。自由奔放なヒロイン・ナオミの生き方は、「ナオミズム」という流行語までも生み出した。

①



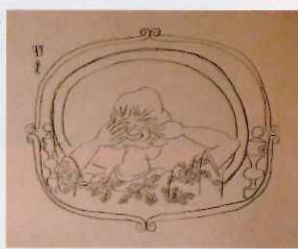
④



②『蓼喰う虫』小出楯重による挿絵原画

夫は娼館に通い、妻は愛人を持つ。性格の折り合わない夫婦は誰も傷つけずに円満な離婚をしようとするが……。最初の妻千代との離婚問題の渦中にあった谷崎が、現実とほぼ同時進行で1928～29年に新聞連載した小説。挿絵は洋画家の小出楯重(1887～1931)。後に谷崎は「故小出楯重君の挿絵が非常によく、これが随分はげみになった」(『細雪』回顧)と書いている。

②



⑤



③愛猫「ペル」の剥製

谷崎は1931年、文芸春秋の記者で知的美人の丁未子(とみこ)と2度目の結婚をするが、わずか2年後に別居。傷心の丁未子は谷崎の可愛がっていた猫が欲しいと手紙を寄越す。そんな猫をめぐる男女のおかしくて哀しい関係を昇華させたのが、『猫と庄造と二人のおんな』(1937年刊)。「ペル」は後年の愛猫だが、剥製から谷崎の猫に対する独特の愛着が感じられる。

③



④『春琴抄』特装本(1933年、創元社刊)

3度目の結婚の相手は大阪・船場の御寮人だった松子。上方文化を体現し、美しさと教養を兼ね備えた松子こそが、『盲目物語』(1932年刊)『蘆刈』(1933年刊)『春琴抄』『細雪』(1946～48年刊)など、谷崎文学の最高峰を支えたミューズだった。黒漆と赤漆で装丁された『春琴抄』特装本には、谷崎の造本に関する美意識とこだわりが結集されている。

⑤棟方志功板画『トreadルパンツの千萬元』(1962年)

晩年の谷崎は甥の妻ではつつとした現代女性の千萬元(ちまこ)に魅了される。静岡県熱海市の谷崎と京都市に暮らす千萬元は頻繁に手紙を交わし、谷崎は千萬元をモデルに小説『痴癡老人日記』(1962年刊)を書く。展示資料は谷崎の和歌<トreadルパンツの似合ふ渡辺の千萬元の織き手にあるダリア>を親交のあった画家、棟方志功が板画に仕立てた作品。

谷崎潤一郎(1886-1965)の 没後50年と生誕130年

2015年は谷崎の没後50年、2016年は生誕130年にあたります。「文豪は時空を超えて」はその共通テーマで、谷崎ファンの皆さまに記念のロゴも作成していただき、共通テーマと共にチラシの表面に掲載しています。今後も谷崎文学の継承と地域文化の発展に努めてまいります。ご支援のほどお願い申し上げます。

また、本年(2015年)4月18日(土)にはルナ・ホール(芦屋市業平町8の24)で谷崎映画名作選として山口百恵・三浦友和主演の『春琴抄』の上映会を開催します。さらに谷崎の誕生日に当たる7月24日(金)には同ホールで「残月祭」を開催します。残月祭の詳細は決まり次第、新聞紙面、ホームページなどでお知らせします。ご期待下さい。

谷崎の生きた阪神間

ロビー展同時開催

1925年(大正14年)に建造された芦屋・業平橋(芦屋市所蔵)



1937年ごろの芦屋・本通商店街(芦屋市所蔵)



1923年(大正12年)、阪神間に転居した谷崎は生まれ育った東京と異なるこの地の魅力に目覚めていきます。陽光降りそそぐ豊かな自然、古来からつちかわれてきた文化と芸能、あでやかな女性のたえずまいが谷崎の人生に豊かな実りをもたらした、その文学を大きく変化させたのです。

本展に加え、ロビーでは谷崎が暮らした大正末期から昭和初期にかけての阪神間と神戸の風景を紹介します。展示資料は谷崎転居跡地図や鉄道路線図、写真パネルなど。国道電車がのどかに走る業平橋、荷車が行き交う本通商店街。華やぐオリエンタルホテルなど神戸の風景も含まれます。

『正』『猫と庄造と二人のおんな』、そして『細雪』などの谷崎文学を生んだ歴史への小旅行をお楽しみ下さい。